

社会科（地理的分野） 学習指導案

日 時 平成25年 5月31日（金） 研究授業Ⅱ
 学 級 1年C組40名
 会 場 3B3C教室
 授業者 七木田 俊

1 単元名 世界の諸地域 「南アメリカ州」（帝国書院）

2 単元について

(1) 生徒について

小中連携の視点から小学校社会科と本単元との関わりを考えた際、『小学校学習指導要領』によると、生徒は小学校第5学年社会科「主な国の名称と位置」において、「世界の主な国を取り上げ、その国の名称と位置を地図帳や地球儀などで調べ、白地図などに書き表」している。『新しい社会5上』（東京書籍）では、「我が国とそれらの国との位置関係を確認」する際に、南アメリカ州、またその主な国であるブラジルやアルゼンチンの位置を取り扱っている。『新しい社会6下』（東京書籍）では、外国の異なる文化や習慣を理解し合う手掛かりとして、歴史や文化などで我が国とつながりの深い国であるブラジルを取り上げ、人々の様子をどのように調べまとめたらいいか、日系移民の生活の様子がまとめられた作品を例示している。

上記を踏まえ、「南アメリカ州」について、学習前にコンセプトマップを作成させたところ、大きく以下のようなものがみられた。

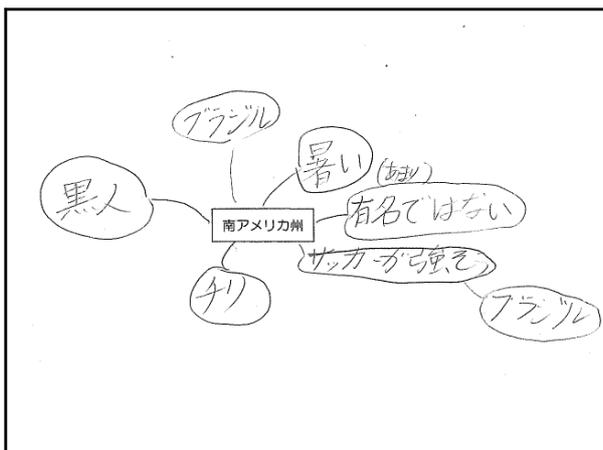


図1 コンセプトマップ①

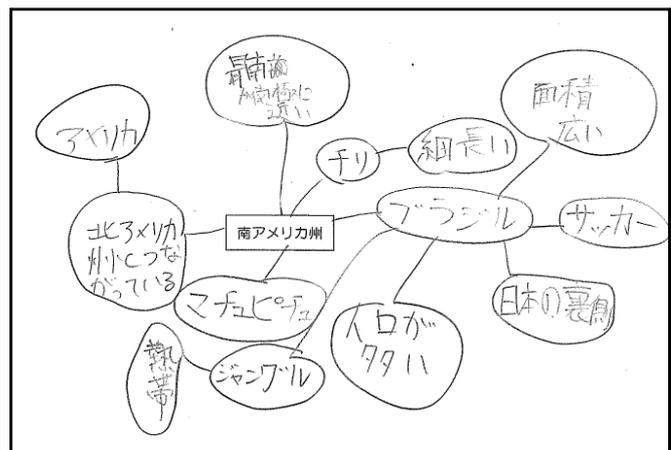


図2 コンセプトマップ②

1つは図1にみられるように、国名以外、小学校及び中学校社会科の既習事項はほとんどみられず、生活体験の中で得た知識やイメージが中心のものである。また、もう1つは図2にみられるように、地理的位置関係を中心に、日本との関わりについて記入されたものである。ただ、いずれも、まさに中学校社会科地理的分野において長年の課題とされてきた「人の姿が見えない」という指摘通り、人々の生活の様子に関わる記述がほぼみられない。小中連携の視点、後述する「世界の諸地域」学習の意義、また前記の指摘に答える意味でも、そこに暮らす人々の姿を明らかにしながら、地域的特色を探る学習を進めていきたい。

一方、地理的分野に対する興味・関心は歴史的分野に対して大きく落ち込んでおり、多数の生徒が「地理は嫌い」と感じている。これは、従来から指摘されてきた「地名物産地理」的イメージを、生徒が抱いているからであることが、アンケート調査より明らかになった。①適切な地理的事象を選択すること、②それがなぜそのようにみられるのかといった地域的特色を、自然環境や社会環境といった環境条件からだけでなく、他地域との結びつきや人々の営みから「一般的共通性や地方的特殊性」という視点で明らかにしていくこと、③他の意見や考えを知る意見交流場面を数多く設定すること、④豊富な資料から適切な情報を読み取らせ活用する活動を取り入れ、地理的事象を多面的・多角的に考察すること、により地理学習の楽しさに気付かせ、地理的分野に対するイメージ改善のきっかけとしたい。

(2) 教材について

① 「世界の諸地域」学習の配列及び主題について

今次学習指導要領では、「世界の諸地域」で全ての州を扱うこととなった。本単元は、『中学校学習指導要領』地理的分野の内容(1)「世界の様々な地域」における、「ウ 世界の諸地域」中の「(オ) 南アメリカ」にあたる。本校では、「世界の諸地域」の最初の単元に設定した。州を学習する順番に特に拘束はないことから、世界の諸地域→日本の諸地域→身近な地域という学習配列を考えた際、地理的距離が遠い地域から学習し、徐々に直接生活地域に近付いていく流れの方が、理解を深めやすいと考えたからである。また、主題を「大都市への人口集中」と設定した。『中学校学習指導要領解説社会編』(以下、指導要領解説)では、「森林破壊と環境保全」を主題例とし、「なぜアマゾンの森林が減少し、サトウキビ栽培が増加しているのか」という学習課題と、その追究イメージが示されている。一方これはあくまで例示であり、「例示と異なる趣旨の主題を設定して指導することができる」こと、「学習内容及び学習過程を設計し、生徒の生活経験と結び付いた情報を豊かに獲得させていく指導上の工夫」が求められ、「我が国との比較や関連を図る視点をもって主題を設定すること」が示されている。上記に加え、大都市への人口集中の原因を考察させたり、今後の人口の流れについて予測させたりしながら主題を追究する過程で、南アメリカ州の地域的特色をより深く理解することが可能だと考えたからである。

本校における学習内容の配列と主題、及び『中学校学習指導要領解説社会編』(以下、指導要領解説)の主題例は以下の通りである。

配列	世界の諸地域	本校の主題	指導要領解説による主題例
1	南アメリカ州	大都市への人口集中	森林破壊と環境保全
2	アフリカ州	モノカルチャー経済下の人々の生活	モノカルチャー経済下の人々の生活
3	ヨーロッパ州	EUの発展と地域間格差	EUの発展と地域間格差
4	北アメリカ州	世界中に影響を与える多民族国家	大規模農業と工業の発展
5	オセアニア州	結び付きの変化	アジア諸国との結び付き
6	アジア州	各地域の様々な生活	人口急増と多様な民族・文化

州全域を隈なく学習するのではなく、人々の日常生活がイメージできるような具体的事例を開発することを念頭に置きたい。また、基礎的・基本的な知識を習得する学習を行った上で、生徒の関心と結び付きやすい主題を設定し追究する中で、地域的特色を明らかにしていきたい。

② 南アメリカ州について

南アメリカ州は12の国から構成され、赤道をはさんで北半球と南半球にまたがる地域である。太平洋側には長大なアンデス山脈が南北につらなり、東部にはなだらかなブラジル高原が広がり、アマゾン川やラプラタ川の流域には、広い平野がひらけている。赤道付近の広大なアマゾン川流域には、地球上の二酸化炭素を吸収するセルバとよばれる熱帯雨林が広がり、ラプラタ川下流域のパンパは温帯で、小麦やとうもろこし、肉牛の放牧など、企業的な農業がさかんに行われている。一方、草原の広がるブラジルのカンポとよばれる地域では、コーヒーやカカオなどの農産物が単一栽培されるモノカルチャー経済が今なお色濃く見られる。こうした自然環境に関わって、いずれの国でも、環境保護と資源開発や経済発展をいかに両立させるかが現在の課題となっている。また、その遠因には歴史的背景が関わっている。15世紀末にコロンブスが西インド諸島に到達する以前から、この地域には先住民が生活しており、ユカタン半島のマヤ、メキシコ高原のアステカ、アンデス高地のインカなど、高度な文明が栄えていた。しかし、16世紀に入り、スペイン人やポルトガル人が先住民の国を滅ぼし植民地をつくり、ラテン系の人々が多く移住するようになると、スペイン語やポルトガル語が公用語となり、カトリックが信仰され、ラテンアメリカと称される状況がつけられた。また、南アメリカ州にはスペインやポルトガルなどのヨーロッパ系のほか、かつて奴隷として強制的に連れてこられ、大農園や鉱山で働かされたアフリカ系の人々とその子孫、日本やインドからの移民とその子孫も暮らし、ヨーロッパ系と先住民の混血であるメスチーソ、ヨーロッパ系とアフリカ系の混血であるムラートと呼ばれる人々が人口の大きな割合を占めている。そんな中、近年、農村部から都市部への移住者が急激に増えており、それに関わる諸問題が、2016年の夏季オリンピックを控えたブラジルを中心に深刻になっている。

そこで本単元では、「大都市への人口集中」を主題に、今後の人口の流れを考えさせる中で、前記のように南アメリカ州の地域的特色を明らかにしていきたい。

(3) 学びの自覚化について

本校研究主題を受け、社会科では、「見かけに惑わされず、多面的・多角的に事象をとらえて、本質を見抜くこと」を「批判的思考力」ととらえ、これが「言語化」をともないながら主体的に行われ、学習者自身が学びのプロセスをメタ認知し、自分自身で物事を成し遂げられるという自己効力感を持つ状態を「学びの自覚化」と捉えている。「学びの自覚化」を促すために、次の3点を視点として設定した。

① 課題化	② 言語化	③ 一般化
ア 社会的事象を的確にとらえる。 イ 社会的事象相互の関係構造を把握する。 ウ 課題を発見・把握する。 エ 解決の見通しを立てる。	ア 資料を収集し、読み取り、読み取った情報を記述する。 イ 社会的事象の意義や意味を解釈する。 ウ 社会的事象間の関連を説明する。 エ 自分の意見をまとめて論述する。	ア 全体構造を把握する。 イ 学習成果が転移・応用可能かどうか考える。 ウ 実社会とのかかわりを見いだす。

このうち、本単元では「② 言語化」に焦点をあてる。小グループでの学習活動を取り入れながら、自然環境、歴史や文化といった視点から南アメリカ州の地域的特色を考察させたり、大都市への人口集中の理由、今後の都市人口の割合について、教科書や資料集、学習プリントなどから、適切な資料を選択、活用させ、考えをまとめさせたりする（上記②ア）。最終的には、他の考えを参考に、複数の資料から自分の意見をまとめて論述させたい（上記②エ）。

3 単元の指導目標及び評価規準

(1) 指導目標

南アメリカ州の自然環境、歴史や文化など地域的特色を大観させた上で、大都市への人口集中を主題に設定し、それを追究する過程を通して、南アメリカ州の地域的特色（特に人々の営み）について多面的・多角的に考察させるとともに、考察した過程や結果を適切に表現させる。

(2) 評価規準

	社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用 の技能	社会的事象についての 知識・理解
観 点	南アメリカ州の人々の生活の様子や地域的特色に対して関心を持ち、学習課題の解決に向けて意欲的に考えようとしている。	南アメリカ州の人々の生活の様子や地域的特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	南アメリカ州に関する様々な資料から有用な情報を適切に選択し、人々の生活の様子や地域的特色について読み取ったりまとめたりしている。	南アメリカ州の人々の生活の様子や地域的特色を、一般的共通性と地方的特殊性という面から理解し、その知識を身に付けている。

4 単元の指導計画及び評価計画 (単元:「南アメリカ州」4時間)

時	指導内容	評価	評価場面
1. 南アメリカ州の自然環境と歴史・文化 (=地域的特色の大観)			
1	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州に関して知っていることを想起させ、記入させる。 構成する国名と位置、気候や地形などの自然環境を調べさせる。 歴史的背景を理解させ、南アメリカ州独自の文化がみられる理由を考察させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州を構成する国名と位置を理解し、自然環境や歴史、文化という面から特色をまとめている。 <p>【知識・理解】</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業 挙手、発言 ワークシート
2. 大都市への人口集中① (=主題の設定及び追究①)			
2	<ul style="list-style-type: none"> 主題「大都市への人口集中」に関わり、「なぜ大都市へ移住する人が多いのか」という学習課題を設定する。 産業に着目し、主に農業と工業という視点から南アメリカ州の現状を理解させる。 資料や他の意見を参考にしながら、最終的な自分の考えをまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州の大都市に人口が集中する理由について、資料や他の考えを参考に、農業と工業の視点から自分の考えをまとめている。 <p>【思考・判断・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州の農業と工業の現状を理解している。 <p>【知識・理解】</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業 挙手、発言 ワークシート
3. 大都市への人口集中② (=主題の追究②)			
3 本 時	<ul style="list-style-type: none"> 主題「大都市への人口集中」に関わり、「南アメリカ州では今後も都市人口の割合が増加するのだろうか」という学習課題を設定する。 前時までに習得した知識や資料を選択、活用し、考察させる。 他の意見を参考にし、既習事項を根拠に複数の視点から自分の考えをまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州の今後の都市人口について、資料や既習事項を根拠に、他の考えを参考にしながら、初発の予想より視点を2つ以上増やして考えをまとめている。 <p>【思考・判断・表現】</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業 挙手、発言 ワークシート
4. 南アメリカ州のまとめ			
4	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州について学習したことを、白地図等にまとめさせる。 コンセプトマップを再度作成し、学習前に作成したものとの変化を読み取らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 南アメリカ州の特色について考察した過程や結果を、自然環境、歴史と文化、農業、工業、人口という視点から地図を活用してまとめている。 <p>【技能】</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業 挙手、発言 ワークシート

5 本時について

(1) 主題 大都市への人口集中②（主題の追究②）

(2) 指導目標

- ① 南アメリカ州の今後の都市人口について、資料や既習事項から根拠となるものを選択し、他の考えを参考にしながら予想できるようにする。
- ② 思考過程を振り返り、自分の認識の変容を自覚できるようにする。

(3) 評価規準

南アメリカ州の今後の都市人口について、資料や既習事項を根拠に、他の考えを参考にしながら、初発の予想より視点を2つ以上増やして考えをまとめている。 【思考・判断・表現】

(4) 指導の構想

本時は、南アメリカ州について、主に構成する国々の名称と位置、気候や多様な自然環境、歴史的背景や文化など、様々な面から地域的特色を大観した1時間目、「大都市への人口集中」という主題を追究するために設定した学習課題、「なぜ南アメリカ州では大都市へ移住する人が多いのか」を考察しながら、主に農業や工業の特色について理解を深めた2時間目に続く、4時間扱いの単元3時間目にあたる。

① 「批判的思考力」を高める手立て

本校社会科では、「批判的思考力」を「見かけに惑わされず、多面的・多角的に事象をとらえて、本質を見抜くこと」と定義している。多面的・多角的に事象をとらえさせる際、その事象そのものが生徒の追究意欲を喚起し、追究する価値が高いものであると、その学習を通して高まった「批判的思考力」が確かなものになると考える。そこで、本時において主として扱う社会的事象を「大都市への人口集中」とし、その未来予想を学習課題とする。未来予想は既習知識を活用しなくとも自由に発想できること、また答えがない（と思っている）ことから、生徒は意欲的に学習活動に取り組むことができる。また何より、大都市への人口集中の今後を考える過程で、実際に移住した人をはじめ、そこに生活する人々の立場にたって考えたり、農業や工業といった産業をはじめ、地域的特色の総合的な理解にもつながりやすかったりすると考えたからである。

初発の予想の根拠は、一面的であったり、既習事項を生かしていないものが多いと考えられる。そこで本時は、研究の視点「② 言語化」に焦点をあてる。特に、「世界の諸地域」の最初の単元であることを鑑み、小グループでの学習活動を取り入れながら、まず「ア 資料を収集し、読み取り、読み取った情報を記述すること、そして習得した知識などを活用し、「エ 自分の意見をまとめて論述すること」を念頭に置き、学習を進めたい。結果として、気候や自然環境の特色、ブラジルをはじめとした大都市の工業化、スラム人口の増加といった習得した知識、都市環境の悪化、都市での経済格差といった新たに獲得する知識を視点としてまとめながら、多面的・多角的に事象をとらえさせ、「批判的思考力」を高めていきたい。

② 「社会参画」意識の醸成

「公共的な事柄に自ら参画していくためには、社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりする能力が不可欠である」こと、「自ら参画していこうとする意識を高めるためには、学習者自身が社会の中から課題を見出し、多面的・多角的に考察し、公正に判断する学習経験を積み重ね、その学びに対する自己効力感をもつことが大切である」ととらえている。①で述べたように、本時は、今後も南アメリカ州の都市人口割合が増加するかどうか、多面的・多角的に考察させる授業である。4月に入学した生徒たちにとって、初めて経験する学習の流れであり、本時だけで社会参画の意識を醸成することは難しい。このような授業を繰り返し、後記の自己効力感をもたせることで、社会参画意識の醸成を目指していきたい。

③ 「学びの自覚化」との関わり

A「批判的思考力」が、「言語化」をともないながら主体的に行われ、B学習者自身が学びのプロセスをメタ認知し、自分自身で物事を成し遂げられるという自己効力感をもつ状態が「学びの自覚化」ととらえている。Aについては①で述べた通りである。Bについては、終末で本時を振り返った際、生徒自身が、今後の都市人口の割合が増加するかどうか、複数の資料や他の考えを参考に考察することで、根拠となる視点が増えたことを実感できるようにしたい。こうした成功体験を重ねていくことが、自己効力感の高まり、延いては「学びの自覚化」につながると考えるからである。そのために、振り返りの際は「授業前・授業後・今後」という三段構えで感想を記入させること、また「今まで私は～について、…のように考えていたが、今は…と考えるようになった。これからは…」というパターンで振り返らせることで、より効果的に自分の認識の変容を自覚できるようにさせたい。

